

意味を有意義化し「おもろ」の反復部として固定させたのは王であった。それまで、主に神女で閉じられていた歌謡表現の世界にくさびを打ちこむことができるのは、シャーマニズム的世界を相対化できる古代專制君主としての王しかいない。「おもろ」の反復部はこのような王を背景にし発生した歌謡表現であったとする。さらに、歌謡表現における王権聖化のモチーフを南島歌謡の反復句に負わせて、反復部として固定させたのは、古代專制君主としての尚真（第二尚氏・一四六五）一五二六）であったとする。古代專制政君主を背景にした「おもろ」の抽象的な意味を考えるのは古代国家である琉球王府という空間であった。抽象化した意味に支えられるようになつた歌謡は、もはや村落共同体には還元

されない。このため表現を支える空間、つまり首里王府の崩壊とともに「おもろ」も消滅したのであるとしている。さらに王の即位、行事、王と水、太陽、王権と儀礼、王と天皇について、「おもろ」を中心に斬新な見解を縱横に展開している。また、「Ⅳ注釈・資料・研究史」は著者の本領が發揮されており、

このグループから数々の説話集や、論考が世に出ていることは周知のことだ。今度発刊されたこの本も、四半世紀にわたる調査研究に参加なし協力された一三名の方々の論文集である。先ず、目次をあげておこう。

#### I 総論

南島説話の伝承世界

福田 晃

#### II 南島説話の性格

民間神話と呪詞

真下 厚

#### 本格昔話の成立

岩瀬 博

#### 伝説と史譚の位相

中村 史

#### 笑話と艶笑譚——南島的位相をめぐつて

松本孝三

#### 例を中心として

原田信之

#### 鳥獸草木譚の自然

真下美弥子

#### 世間話のなかの妖怪譚——伊是名島の事

昌山 篤

#### 原例を中心として

狩俣恵一

#### III 南島説話の伝承社会

南島説話の民俗社会——喜界島の民間説

松浪久子

#### 話を通して

南島説話と儀礼——粟国島のヤガン折目

畠山 篤

#### を例として

南島説話と芸能——竹富島の種子取祭り

狩俣恵一

#### と伝説歌謡

南島説話の伝承者

松本孝三

### 書評 福田晃 岩瀬博編

#### 民話の原風景——南島の伝承世界

小川学夫

本書の編著者、福田氏、岩瀬氏を中心には島だったが、以来奄美はもとより、沖縄諸島、南島の民話調査が開始されたのが、昭和四六年宮古諸島、八重山諸島のほとんどに足を運んだことであった。最初の調査地は奄美の徳之だという。その成果も半端なものではなく、

#### IV 南島説話の比較

南島説話と本土

南島説話と韓国——屋良漏池伝説と沈清

伝 丸山顯徳

南島説話と中国——人類起源の物語

百田弥栄子

どれもが、豊富な採集資料に即した実証的な論文で、私たちに南島民話の豊かな世界と面白さを教えてくれるが、先ず福田氏の冒頭の論文が、南島における伝承世界の全體像を提示し、私たちの目を開かせてくれる。

民間説話の研究といえば、ジャンルを規定し、個々の説話を分類することが基本的な作業の一つだが、さて、南島の話を従前の本土式分類に当てはめようとすれば、いささかの齟齬があることは、これまで多くの研究家によつていわれてきたことだ。福田論文もそこから出発して、むしろ本土との違いを際立たせることで、南島説話を説明しているといつてもよいであろう。

氏は南島説話のジャンルを、これまで一般に使われてきた伝説、昔話、世間話という三つのジャンルに加えて、南島では民間に今も生きづいている神話を入れる。さらに本土では書承文学にとりいれられたが、南島では依然口承の世界に存在する史譚に注目し、これ渡っているが、問題のいくつかは後の人たち

を昔話のなかに位置づけることで、大槻四つの中のジャンルを設定された。

以下、神話、伝説、昔話、世間話の順に、

多くの具体例があげられ南島説話の実態が提

示されていくのであるが、本論の特徴の一つは、神話と伝説の間、伝説と昔話の間、世間

話と昔話の間、それぞれのジャンル間の動

態が生き生きと描かれていることである。

たとえば、宮古、狩俣の祖神祭で神人に

よつて歌われる神歌の一つに、「真津真良の

フサ」というのがある。この歌に登場する真

津真良は狩俣の二代目女酋長で、本来伝説世

界の人物という。伝説が神話に取り入れられ

た例だ。

また、沖永良部の巫者、ユタが死靈を降ろ

す時に唱える呪歌に、同地に伝わる世の主の悲劇的な伝説をあつかったものがある。それ

も福田氏は、英雄伝説の聖性神話化という構

図でとらえられている。

柳田國男の研究を教科的に当てはめれば、

神話→伝説→昔話→世間話となるのかもしれ

ないが、福田氏は「→」がその逆になる例が

あることも明らかにしてくれた。

そのほか、本論が指摘する問題は多岐に

松本氏の「笑話と艶笑譚」は、南島の説話

の各論に引き継がれているといつてもよい。

以下、書評の形にはならないかもしれないが、各論の問題点を要約し、紹介することで

本稿の責を果たさせていただく。

眞下氏の「民間神話と呪詞」は、実際の祭儀の場で神人によって唱えられる呪詞と、同

じ主題のものでありますながら祭儀の周辺、ないし外で語られている説話とを比較観察し、構

造的には呪詞→説話という過程をたどるが、

実際の生成には説話→呪詞という筋道もある。

であろうと推定したものである。そこには神

がかるシャーマンの深いかかわりを認める。

岩瀬氏の「本格昔話の成立」は、本土と南

島説話のジャンル論と生成論にかかる重要

論文である。いわゆる本土の本格昔話といわ

れてきたその話柄が、おそらく「遺老説伝」

が編纂された一八世紀前後に、どつと沖縄に

入って、それらが由来話として再創造され

だと説かれている。

中村氏の「伝説と史譚の位相」は、沖縄系

満市と周辺に伝わる伝説と史譚をあげながら

濃淡の別はある、伝説は信仰を基盤としたも

のであり、史譚は歴史意識に支えられて広く語られものであることを確認したものである。

群は眞実の話に傾いているとよいわれるが、さらに島の巫者ユタの伝承と相互に結びついこのとき笑話や艶笑譚は南島でどう伝わり、「民間説話は民俗社会をどう機能しているのかを問う。奄美、沖縄の各地域の実態を追いながら、本土とは違つて、退にともなつて民間説話を衰退する」という。

伝説や本格昔話、あるいは民間神話、史譚と結びついて広がりを持つという。

真下（美弥子）氏の「鳥獸草木譚の自然」は「雀孝行」「カラスとコハル」「雲雀と若水」「煙草の起源」等々の話をあげながら、南島独自の生活や世界観、死生觀と密接に結びついて伝承されていることを述べたものである。

原田氏の「世間話のなかの妖怪譚」は、伊是名島に、キムジナー（木の精）系の妖怪とは微妙に違うウンサガナシーといわれる妖怪を主に扱う。今は人気がなくなった「妖怪は神の零落した形だ」という柳田国男説もここでは有効だという。

以上が、いわゆる各ジャンルにかかる論考だが、以下の四編は話が伝承されるその社会的、民俗的な背景をとおして南島説話をアプローチしたものである。

松浪氏の「南島説話の民俗社会」は、喜界島の年中行事を説明する話をあげて、話が生活のなかでなんらかの機能を有していること、

て、男性優位の傾向があるのは、南島の説話で、男性優位の傾向があるのは、南島の説話世界が虚構よりも眞実に傾く神話、史譚、伝説が多いこととなるという。

畠山氏の「南島説話と儀礼」は、粟国島のヤガン折目といわれる祭祀の由来譚をめぐる論考である。その由来譚はいくつかのバリアントがあるが、そこに登場する神は、栗の収穫祭にやつてくる來訪神的な要素をもちながら、島人に祟りをなす悪神として語られている。

畠山氏はこれを、祭儀を怠ると祟りがあると教えるいわば島の伝統的な祭政一致体制を守る機能が附加されていたと結論する。

狩俣氏の「南島説話と芸能」の結論は畠山論文といささかの重なりがあるかもしれない。氏は竹富島の豊饒を祈願する種子取祭りのなかに、「タラクジ」と「仲筋のヌベマ」という村の悲劇的な伝説とともにまた歌が演目として出てくることをあげ、それは祭祀を保持する村落共同体の存在意義を確認する機能を果たしているのだとするのである。

松本氏の「南島説話の伝承者」は、奄美、沖縄、宮古、八重山各諸島の代表的な話し手をあげ、伝承する話柄、話數、研究者との出合い等を報告している。全体的に本土と違つ

て、男性優位の傾向があるのは、南島の説話と韓國の「南島説話と韓國」は、沖縄と韓國に伝わる龍退治型説話の比較を行う。両者の話の筋は似ているが、伝播の道筋は、中国→韓国、中国→沖縄の二コースだと推定。なお丸山氏の「南島説話と韓國」は、沖縄と韓國と韓國では、この話が伝承される背景にいささかの異動があり、それぞれの話型に影響を与えていると指摘する。

本書最後の論文が、百田氏の「南島説話と中國」である。南島の兄妹始祖説話を足掛かりに、中国の諸民族が伝える豊富な説話群をあげて、先ず兄妹婚は神々の世界では普遍的な婚姻形態であるという。中国のこの系統の

神話が祭りの場の人々の実修と深く結びついていることを述べ、南島の人類起源説話も「真実の話」として伝えられてきたのは、そうした基盤があったからではないかと示唆する。

以上の論文紹介が、要を得ているかどうか、またこれだけで書評の体なしているのかどうか、正直いって自信はない。が、最後に次のことだけはいっておきたい。

これまで南島文学史といえば、「おもろそ

うし」を頂点とする歌謡群だけを材料に構築される傾向にあった。しかし、諸氏によつて伝承説話に関するすぐれた著書や論文が世に出されるにつれ、從来、説話群に関心なかつた人のいく人かも、歌謡だけで文学史を組み立てるのは全くもつて不完全だと思いつつある。本書が、そのことを、もっと多くの人々に気づかせる決定打となることを願つてやまない。

(おがわひさお／鹿児島純心女子短期大学)

## 書評

酒井正子著

### 『奄美歌掛けのディアローグ——あそび・ウワサ・死』第一書房一九九六

ト田 隆嗣

「本書は、一九八三年から一九九五年までの、奄美・徳之島を中心とした民俗音楽文化に関するフィールドワークにもとづく論文集である」(三頁)。「のべ滞在期間は一年半ほど」(同)にわたる「文化人類学的な住み込み調査をイメージ」(一五頁)した、「音楽民族誌的研究」(同)である。日本の芸能研究において、こうしたアプローチは決して多くない。

成で、序章(一部)と各章に一節ずつ、その理由を追求してゆけば、わが国の芸能研究

究と文化人類学的なフィールドワークとの双方について、それぞれの内包してきた問題点が明らかになる気がするが、そんなことを考

えさせるほど、著者のとったアプローチとその成果は、この地域の研究に関して門外漢の私が明らかになる気がするが、そんなことを考

I 「あそび」の章では、徳之島の夏目踊り、《田植歌》《キヨーダラ》といった集団で掛け合う舞踊歌、それに奄美大島のマンカイ(「手舞、手踊り」)に関する論考が展開される。

井之川集落の夏目踊りと目手久集落の立ち踊りにおける音楽(歌唱)の比較検討は、集団の歌掛けにおける即興性をめぐるものである。私の勝手な理解では、この即興性とそれを包み込む広い意味での様式性が、著者の徳之島研究における音楽的側面に関するキ